

## 第4章

# 相浦谷の歴史と文化財



相浦谷の位置

### この地域の小中学校

小学校：日野小学校、相浦小学校、<sup>あいのうら</sup>相浦西小学校、相浦西小大崎分校、中里小学校、<sup>かいせ</sup>皆瀬小学校、大野小学校、春日小学校、<sup>ゆきのき</sup>柚木小学校

中学校：日野中学校、相浦中学校、中里中学校、大野中学校、柚木中学校

## 第4章 相浦谷の歴史と文化財

### 歴史の宝庫・相浦谷

佐世保市の中部には、東から西へ<sup>1</sup>相浦川が流れています。相浦川によってつくられた東西約10キロメートルの谷は、「相浦谷」と呼ばれています。谷の奥の相浦川上流域に柚木地区、中流域に大野・中里皆瀬地区、下流域と海岸部に相浦地区と日野地区があります。

相浦谷は、佐世保市のなかでも川の流域の文化と歴史を最も多く残している、「歴史の宝庫」ともいえる地域です。特に、石器時代と呼ばれる原始の頃の遺跡が多く残されています。



相浦谷遠望

1 全長20.9キロメートル。長崎県第3位の長さ。



旧石器時代の相浦谷

今から13,000年前より古い時代は旧石器時代と呼ばれ、人々はまだ土器を持たず、石器を主な道具として、狩りをしながら移動するという生活を送っていました。気候は氷河期といって、平均気温が現在より5度くらい低い寒い環境でした。そのため、植物も現在見られるシイ・カシ・ツバキなどの<sup>2</sup>照葉樹ではなく、コナラ・クスギなどの<sup>3</sup>落葉広葉樹が多く生えていました。

動物はもっと異なっています。現在この付近にいるイノシシやウサギではなく、<sup>4</sup>ナウマンゾウや<sup>5</sup>オオツノジカなどの大型動物が棲息していました。

- 2 一年を通して緑の葉がある樹木。温かい地方に多く、ドングリなどの木の実が豊富に採れる。
- 3 冬になると葉を落とす樹木。寒い地方に多い。
- 4 明治時代に、このゾウの化石を調査したドイツ人地質学者のナウマンの名をとって命名された。氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。
- 5 角の広がりとは2.5メートル、肩までの高さが2メートルもある大きなシカ。ナウマンゾウと同じく氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。



- 19 相当ヶ原古戦場
- 20 山中観音堂
- 21 手光一族の墓地
- 22 淀姫神社
- 23 眼鏡岩（平戸八景）
- 24 相神浦筋郡代役所跡
- 25 東漸寺（13代盛の墓）
- 26 川下新田
- 27 大潟新田
- 28 岡本水源地
- 29 山ノ田貯水池・浄水場
- 30 軽便鉄道跡
- 31 相当貯水池
- 32 相浦港

あいのうらだに  
相浦谷の地図

最も違うのは、海面が最大で90メートルも低かったことです。氷河期には南極や北極地方には、今よりもっと氷が分厚く堆積していました。そのため現在よりも海水が少なく、海面が下がっていたのです。当時、相浦から沖あいの海にあたる地域は見渡す限りの森が続き、海岸、はるか遠くにあったのです。

この時代の遺跡は、烏帽子岳（標高568メートル）の旧山手小学校烏帽子分校付近から親子池にかけて、また、板山から五蔵岳（標高455メートル）近くの牟田原池付近にかけての山間部に多く残っています。このあたりは広い台地となっていて、旧石器時代は動物が多い狩場だったと考えられています。人々は幾度となく狩りに訪れ、その人たちがキャンプした跡が遺跡として残っているのです。



牟田原遺跡の遺物

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵



菰田洞穴

旧石器人たちは洞穴も利用していました。菰田町の菰田洞穴は、標高約180メートルの台地の先端で、相浦川の支流である小川内川が流れる谷を見下ろす場所にあります。この洞穴の背後には、板山遺跡群など旧石器時代の遺跡が集中する台地があるため、低地から台地への移動の途中に利用できることから、後期旧石器時代（約20,000年前）に何度もキャンプ地として使われていたようです。

菰田洞穴は、縄文時代早期（約8,000年前）になると盛んに利用されていて、たくさんの矢じりと動物の解体具が出土しています。炉跡はありましたが、狩り以外の労働に使う石斧がありません。このことから、この時代も狩りの途中で立ち寄り、付近で狩りをしながら数日を過ごすという利用のしかただったと思われるます。

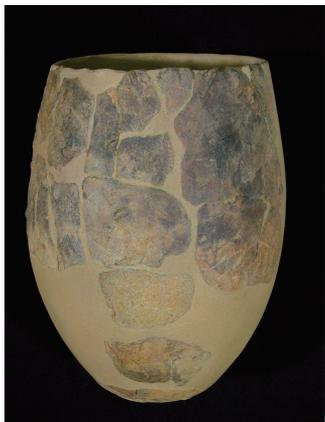
### 土器が発明される

旧石器時代が終わりを迎える頃、瀬戸越1丁目の泉福寺洞窟に住んだ人たちは、全く新しい道具を作りました。それは土器です。

粘土を火で焼くと硬くなるという性質を利用したもので、人類が初めて化学反応を利用した画期的な発明でした。



泉福寺洞窟(国指定史跡)



佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

この土器は、「豆粒文土器」と呼ばれます。高さ20センチメートル程度、口の広さは直径12センチメートルほどで、底は丸いものと平らなものがあります。土器の表面に、豆粒のような粘土を貼り付けて模様を付けていることから、「豆粒文土器」と名付けられました。

土器の表面には煮たきに使った時のススや、煮こぼれが焦げついた炭が付いていました。これらの土器は、科学分析で約12,000年前のものと判定されました。今のところ世界最古級の土器です。

では、なぜ泉福寺洞窟の住人は土器を発明したのでしょうか？それはその頃起こりつつあった環境の変化と深く関係があります。

旧石器時代が終わる約15,000年前頃から、地球は急速に暖かくなっていきました。温暖化のなかで、まわりの環境は大きく変わりました。まず、植物はクスギヤコナラなどの落葉広葉樹から、シヤカシなどのドングリが実る照葉樹の森に変わりました。動物も、オオツノジカやナウマンゾウのような大型動物が北へ移動し、代わりにイノシシやシカ、ウサギなどの小型動物が増えていったのです。



アラカシの実（ドングリ）

※写真提供：ふるさと自然の会

小さな動物はたくさん捕らなければならないので、一年を通して狩りだけで食料を確保することは難しくなってきました。そこで、人々はドングリなどの木の実を食料とするようになったのです。

ドングリは秋に一気に収穫でき、貯蔵することによって長い間食べることができます。問題は、ドングリはシブが強いものがほとんどで、さらに熟を加えないと人の食べ物にはならないということでした。そこで、まず粉にして水にひたしてシブを抜くため、さらに煮るための容器として土器が考えだされたのです。この土器を「縄文土器」といいます。

旧石器時代の調理方法は、最も単純な焼くこと、焼け石を使った石蒸し調理、そして煙で燻す燻製などだったと考えられています。土器の登場は、それに「煮る」という調理方法を加え、柔らかく消化のよい食事を人々にもたらし、食生活を一変させたはずです。

土器の発明により、定住もできるようになりました。土器の出現は、世界的にもユニークな縄文文化の始まりでもあったのです。



縄文土器の作り方

①粘土に砂を混ぜる→②ひも状に伸ばした粘土を積み上げて成形する→③形ができたなら文様を付ける→④約1ヶ月乾燥させた後に焚き火で野焼きする→⑤完成

縄文時代の遺跡

縄文時代は、木の実や山菜などを採る「採集」と、動物を捕る「狩猟」が主な暮らしです。海辺の人たちは海草や貝を採り、魚を捕っていました。これも「採集」と「狩猟」の一つの形です。

瀬戸越1丁目にある泉福寺洞窟は、「草創期」と呼ばれる縄文時代が始まる頃（約12,000年前）の拠点遺跡でしたが、次の縄文時代早期（約8,000年前）になると、生活の拠点は標高約180メートルの位置にある岩下洞穴（松瀬町）に移っています。



調査中の泉福寺洞窟



岩下洞穴（県指定史跡）

では、何故移ったのでしょうか。

それは、縄文土器を使い始める頃は標高が低く、あまり見晴らしも良くない泉福寺洞窟でも充分生活できたのですが、狩りや採集活動が盛んになると、動物が多くて木の実もたくさん採れる、もつと標高の高い場所が求められたからと考えられています。

岩下洞穴からは、総数で1,856点もの矢じりが見つかっています。他にも、石櫓や獲物のシカやイノシシ、ウサギ、ヤマドリなどの骨も出土しました。また、木の実を磨りつぶす石皿や磨石があり、さらに埋葬人骨が29体も発見されました。

このことから、何世代にもわたる定住があったことが分かります。また、縄文時代早期(約8,000年前)の人骨がこれだけまとまって出土することは珍しく、現在詳しい分析が行われています。

岩下洞穴が拠点となっていた縄文時代早期には、各地に出先のような遺跡が現れます。相浦川流域では菰田洞穴(菰田町)・杉ノ尾洞穴(柚木元町)、日宇川流域では天神洞穴(天神2丁目)です。縄文人たちは岩下洞穴を拠点として、佐世保全域を活動の範囲にしていたようです。



岩下洞穴の埋葬人骨



洞穴で暮らす人々

イラスト: 栗山泰文

さらに、その次の縄文時代前期(約6,000年前)になると、今度は下流の下本山岩陰(下本山町)に拠点が移るようです。岩下洞穴にも同じ頃に人は住んでいますが、埋葬は見られません。反対に、下本山岩陰には埋葬があり、遺物の量も岩下洞穴よりはるかに多くなります。



下本山岩陰(県指定史跡)



下本山岩陰の埋葬人骨  
(弥生時代)

下本山岩陰は標高が約15メートルと低く、当時の海岸からそれほど遠くない場所にあります。

遺跡には大量の貝殻が積み重なっていました。また、魚の骨や動物の骨、川蟹の殻もあるところから、山や川そして海から食べ物を得ていた様子がうかがえます。この時期、岩下洞穴では鯛の骨や貝殻が出ています。山に住む人が海のを簡単に捕ることは難しく、これは岩下縄文人が下本山縄文人から交易で得たものか、あるいは岩下洞穴が下本山岩陰の出先となっていて、持ち込まれたものとも考えられます。

弥生時代には生活の跡は無く、下本山岩陰は墓地として使われていました。

縄文土器が出現する頃の縄文時代草創期は泉福寺洞窟、狩猟活動が活発になる縄文時代早期は岩下洞穴、そして漁労活動が盛んになる縄文時代前期は下本山岩陰が拠点でしたが、中期・後期・晩期となると、もはや繁栄した遺跡はなくなります。遺跡が衰退してゆく原因の一つが自然の破壊です。長い間の狩猟と採集の結果、森は少なくなり、動物も減ってしまったのです。

### こめづく 米作りが始まる

弥生時代になると、自然から食べ物を獲得するのではなく、田や畑で自ら作物を生産する時代となります。そうすると、再び相浦谷も繁栄の時代を迎えます。

下本山町の四反田遺跡は、そうした時代のムラです。この一帯は相浦川によって造られた平地となっていて、水田に適した土地です。ここに、弥生時代前期(約2,300年前)に水田を開いて米を作る人々による集落が現れました。



四反田遺跡の竪穴住居跡



四反田遺跡の石棺墓

東西80メートル、南北50メートルの楕円形に並ぶ竪穴住居があり、住居列の内側には倉庫群や貯蔵穴、屋外の炉跡があり、住居列の外側には子どもや大人の墓地が発見されました。

墓地は、子どもだけの墓地、大人は単に地面に穴を掘って葬った一群と、大切に石で囲った石棺群とに分かれていました。これは、身分の違いを表していると考えられます。

四反田遺跡は弥生時代中期頃(約2,000年前)には水田に変わっています。相浦川の氾濫で地形が変化したためと考えられます。この頃の本格的な遺跡は竹辺町の竹辺B遺跡と考えられます。四反田遺跡より一段高い面にありますが、この遺跡はまだ発掘調査が行われていません。

弥生時代中期は集落をもつ遺跡のほか、山間部にも小さな遺跡が分布します。遺跡の性格は分かっていますが、水田に適した低地から、焼畑などのために山あいにも人が進出したのではないかと思います。

弥生時代後期(約1,800年前)になると、相浦川下流の中里町を中心とした門前遺跡が拠点的な遺跡になります。

### 門前遺跡

この遺跡は、相浦川が時代毎に様々な流れをしたために浸食されて、住居跡などはほとんど発見されていません。それでも、遺跡からは、縄文時代前期頃(約6,000年前)から平安時代の終わり頃(約800年前)までの生活を示す土器や石器が出土しています。

縄文時代の遺構や遺物は、主に前期(約6,000年前)、後期(約3,000年前)、晩期(約2,500年前)の3時期のものが見つっています。下本山町にある下本山岩陰は、縄文時代前期の遺跡で、多くの貝が出土していますが、門前遺跡では見つっていません。その違いは狩猟活動(特に漁労)に使用する石器にも見られます。同じ時代でも下本山岩陰では海と山の両方から食べ物を得ていたのに対し、門前遺跡では海との関係が薄かったのではないのでしょうか。



門前遺跡遠景

※写真提供:佐世保文化財調査事務所



縄文時代前期のアクセサリ

※写真提供: 佐世保文化財調査事務所

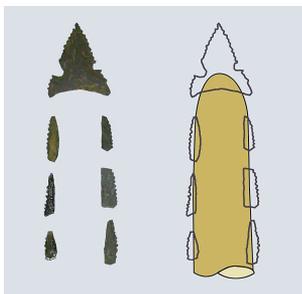


縄文時代前期の土器

※写真提供: 佐世保文化財調査事務所

門前遺跡から出土した縄文時代前期(約6,000年前)の遺物の中には、石で作った耳飾りやペンダントなどのアクセサリもありました。これらをつくるには大変手間がかかることから、当時の人々の心の余裕もうかがえます。

縄文時代中期(約4,000年前)の遺物は出土していませんが、後期(約3,000年前)になると、狩猟活動に加え、海での漁労活動が活発になるようです。門前遺跡でも、大型の「石鏟」と考えられる「石鏟」という石器が出土しています。また、土器の底の部分には、鯨の背骨の跡がついているものもあり、鯨も捕まえていたことがわかっています。



石鏟(左) 同復元図(右)

※写真提供: 佐世保文化財調査事務所

6 魚や海獣(アザラシやクジラ)を突き刺して捕らえる道具。



墓地の広がり(墓域)

※写真提供: 佐世保文化財調査事務所

弥生時代の遺構としては、後期(約1,800年前)の建物の柱の跡や、中央に炉の跡が残る住居跡が見つっています。また、墓が集中する墓域も見つっています。

墓域には、石で囲った石棺墓、土を掘っただけの土壙墓、それに石で蓋をした石蓋土壙墓といろいろな形をしたものがあり、石棺の中が朱色に塗られていた墓もありました。墓の中からは、鉄剣・刀子・ガラス玉などの副葬品が出土しており、この周辺を治めていた身分が高い人の墓と考えられています。

また、当時の川の跡からは、木で囲った箱型の施設(墓もしくはドングリなどのアクを抜くためのものか?)や、鋤・鍬などの木製の農具も数多く出土しています。